

混迷した大統領選挙

盛田 常夫

6月6日と7日にハンガリー国会は次期大統領を選出する。本誌が配布される頃には、大統領が決まっているかもしれない。選出日が2日になっているのは、2回の投票で選出できない場合、3回目の投票が翌日に行われるからだ。

前回と同様に、今回も1日目では決まりそうもない。今回ほど政党相互の思惑が絡み合った大統領選挙はない。最後の最後まで、誰が大統領になるのか、予断を許さない。

大統領は儀礼職

ハンガリー大統領は儀礼職で、政治にほとんど関与しない。国会で採決された法案の署名をおこない、場合によっては法案を国会に差し戻す権限をもつが、その場合でも再修正した法案の拒否権をもたない。ハンガリーの大統領は外交儀礼を主たる職務とする儀礼職だ。だから、ハンガリーの各政党にとって、大統領選挙の政治的重要性は小さい。与党の社会党が一人で意気込んでいるのに比べ、他の政党は醒めた態度をとっている。

ただ、歴史的に大統領選挙は政治的に利用されてきた。体制転換後の最初の大統領だったグンツ・アルパード選出には、与党MDFと野党SZDSZの秘密協定があった。また、グンツ大統領を継いだマードル大統領の選出では、与党のFIDESZが連立相手の小地主党に指名権を与えるという取引をおこなった。

前オルバン政府が小地主党を連立に引き込むにあたって、大統領候補の指名権を小地主党首トルジャンに渡した。連立樹立のご褒美だった。しかし、その後の過程で明らかになったように、小地主党は農業省と環境省を私物化し、トルジャン一家の私財が膨れ上がり、大スキャンダルになった。

そして、大統領選挙が近づくとつれて、トルジャンが自らを大統領候補に指名するのではな

いかという憶測が広がり、大騒ぎになった。いくら何でも、トルジャンのような汚れた政治家が国を代表するのは、一国の恥さらしになる。この世論を察知し、小地主党の不利を感知したトルジャンが、最終的にMDFの法務大臣を務めた法学者、マードル・フェレンツを推薦したことで、漸くハンガリーが体面を保ったという経緯がある。

このように、儀礼的な職であっても、誰でも良いという訳ではない。まず、身辺が綺麗であり、かつ知性があり、ハンガリーの国家を代表するに相応しい人物であることが望ましい。この点から見ると、文学者だったグンツ大統領や法学者のマードル大統領は、この基準をクリアしている。

社会党が意気込む理由

今回の大統領選挙をめぐって、与党社会党は初めから力が入っていた。今度は社会党の大統領を、しかも女性の大統領を実現したいという要求が左派勢力から出された。この動きを触発したのは、去年のメツジェシ首相解任劇である。

日頃から、社会党左派は連立政権におけるSZDSZの発言力の大きさに神経質になっている。連立組閣にあたって、SZDSZは社会党の大臣候補について、あれは良いがこれは駄目だと拒否権を発動する。社会党の議員の10分の1程度の勢力が、社会党員の品定めをするのはけしからんと思っている議員が少なくない。そこに、SZDSZが仕掛けたメツジェシ解任劇である。これで左派はカチンときた。SZDSZがそう出るなら、社会党は自らの意思を貫くべきだ。だから、SZDSZの指図を受けずに、大統領候補を選ぶべきと主張し、その路線に従って4月の党大会で、スイリ・カタリンを大統領候補に選んだ。

ジュルチャーニ首相は沈黙を守り通した。ここで下手に口だしすれば、左派から無用な攻

撃を受ける。自らの首相選出から後を引いている問題だと分かっているからだ。

確かに、スイリは評判の良い政治家で、身辺も綺麗だ。党内の信頼も高いし、他党との関係も悪くない。野党の中でも個人的に支持する人もいる。しかし、国会議長を務める現役の政党政治家である。また、これまでの大統領のように、高い学歴と知的な経歴がある訳でもない。そこが他党の支持を得られないネックになった。

SZDSZの主張

最終投票では有効投票の過半数で大統領が決まるから、連立与党のSZDSZの投票を当てにしないと、スイリ大統領は実現しない。ところが、SZDSZは最初から、現役の政治家は大統領として相応しくないと主張し、その立場を崩していない。いったい誰なら良いのだという社会党の催促に応じて、洪々グラッツ・フェレンツ前科学アカデミー総裁の名前を上げた。彼も社会党左派の流れを汲むから、SZDSZとしては避けたかったのだが、社会党が推せて、政治家でないという基準をとると、彼しかしないということになった。しかし、社会党大会の指名選挙で、グラッツの得票はスイリに及ばなかった。

この最中、5月のギムナジウム卒業国家試験で試験問題の一部が事前にインターネットに流れるという前代未聞の不祥事が起きた。教育大臣はSZDSZのマジャル・バーリントだ。これでSZDSZが混乱した。フォドル・ガーボルはいずれ事態が解決されれば、マジャルは責任をとるだろうとメディアに語ったが、翌日には党首がこれを打ち消し、不祥事ではなく、盗難なのだから、その責任をとる必要はないと言い出した。それにたいして、ジュルチャーニも社会党も、一切口をつぐんで、解任を臭わせる発言を控えている。FIDESZは大統領選とのバーター取引があるのではと疑っている。

FIDESZの付け焼き刃

FIDESZは最初から大統領候補の選出は連立政党に任せていた。社会党関係の人物の中では、

唯一、最高裁判所判事のビハリ・ミハイイなら賛成できると考えていた。FIDESZの指導部の多くがELTE法学部の出身で、ビハリの教え子にあたるからだ。ビハリは旧体制からの共産党員でカーダール時代の終焉に一役買った理論家である。ただ、政治家でないので、社会党内部の支持はないが、大統領の基準はクリアしている。

FIDESZからビハリを推すこともできないので、人気投票による世論調査をやり出した。その結果は、1位が現職、2位が元最高裁判所長官のショーヨム・ラースローで、3位がスイリ。現職が辞退を表明しているので、ショーヨムをMDFとともに、候補に上げることになった。この決定方法は、いかにも付け焼き刃の感を免れない。

最後までもめる

社会党の議席は178で、野党の議席は188。だから、SZDSZがスイリを支持しなければ、ショーヨム元最高裁判所長官が大統領に選ばれる。ところが、SZDSZはMDF系のショーヨムにも反対なのだ。以前の社会党との連立時代に、ボクロシュ大蔵大臣の緊縮政策の一部を憲法違反と判断したのが、ショーヨムなのだ。政府の経済政策に介入した「悪名高い」裁判官だから、社会党もSZDSZも支持しない。

3回目の投票では過半数の支持を得れば良い。ところが、投票基礎数に白紙の棄権票も算入され、20名のSZDSZ議員が両方の候補に白紙投票すると、スイリもショーヨムも投票の過半数をとれない事態になる。各政党の議員が切り崩されるか、3回目に別の候補が立てられ、投票行動がぶれた場合に、大統領が決まる。3回目でも決まらない場合は、改めて仕切り直しということになる。

大統領だけは四党合意で選ばれるのが望ましいという主張もあるが、今回もすんなりとは行かないようだ。憲法裁判所があるのに、大統領も元最高裁判所長官というのも、屋上屋を重ねる感がある。他に社会党の面子が守られる選択はあるだろうか。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)